

動作範囲の拡張

宮 島 達 夫

例文について「コーパス」としたのは国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ : Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)である。

一. 動作の全体と部分

「風呂に 入る」と「風呂から 出る」とは、右のaのタイプの反義対をなすが、全体の行為をも「風呂に 入る」と表現する(「風呂に入って、そのあとでビールを飲む」)。(村木 [1987], p.33-34)

「風呂から出る」と対をなす「風呂に入る」という移動は、「湯船につかる、体をあらう」などの目的を達するための準備的な行為である。一方、「風呂に入って、そのあとでビールを飲む」というときの「風呂に入る」は、準備的な動作と本来の目的である「体を洗う」などをひっくるめた範囲をさす。「映画館に(デパートに、食堂に)はいる」なども本来の目的ははいつてからの動作にある。「トイレにいく」も単なる移動ではなく排便の婉曲表現に使われる。

the expression 'to go to bed' may, depending on the situation, evoke the metonymic target 'to go to sleep,' 'to have sex' or 'to be sick.' (G.Radden et al. [1999], p.22)

動作の一部で全体をさす、換喩的な用法は、かなりひろくみられる現象である。以下、このような現象をひろってみよう。

二. 「い く」

「いく」という動詞は、ある地点から移動がはじまって、ある地点でおわる

ことをあらわす。たとえば、「アメリカへいく」という動作は成田を(または自宅を)出発してアメリカの空港に到着したときにおわる。そして、つぎには「アメリカにいる」という状態がつづく。一方、「アメリカにつく」は「アメリカへいく」の最終段階としての瞬間的な現象をあらわす。「いく」は、もともと「行き」という名詞がしめすように、往路だけをあらわすはずである。東京にすんでいる人が京都へ旅行するとき、

京都へいったとき、行きに新幹線で富士山をみた。

なら疑問の余地がない。

京都へいったとき新幹線で富士山をみた。

でも、往路ととるのが自然である。しかし、ひょっとしたら復路かもしれない。また

京都へいったとき、新宿でこの地図をかった。

では旅行前の準備、

京都へいったとき、この地図を利用した。

では、たぶん京都滞在中、

京都へいったとき、みんなにくばったのはこの絵はがきだ。

では、東京の絵はがきを京都でくばったのか、京都の絵はがきを東京へかえってからくばったのか、あいまいである。

アメリカへいく(いった)ときの船で、はじめて外国人と話した。

は往路だが、

アメリカへいったときは学生寮にすんでいた。(=アメリカにいたとき、滞在中)

アメリカへいったときは成田につくまで飛行機酔いになやまされた。(=ア

メリカからかえるとき、復路)

のように往路の範囲をあとまで延長した表現でもつかわれる。

熊谷の小畑にも、この間行った時、処世上の意見が合わないので、議論をしたが(田山花袋「田舎教師」)

では、議論をしたのは移動の途中ではなく、熊谷での滞在中である。

もっとみじかい過程についても、おなじである。

買い物にいくとき、雨がふってきた。

はあきらかに往路だが

買い物にいったとき、雨がふってきた。

は往路＋滞在＋復路をあわせた全段階をあらわし、どの段階でほんとうに雨がふったのか、正確にはわからない。

「ちょっと薬を買いにいきます」「ちょっと薬を買ってきます」

これらは、表面上は、薬を買いに行く(往)と薬屋からかえってくる(復)という、べつの事実をあらわすが、じつはどちらも両方の事実をふくんでいて、それぞれ一方の移動を省略している。

「でかける、つく」が移動の開始・終了の瞬間をあらわすのに対し、「いく」では重点が移動の全体におかれる。「10時にでかけた」「ついたときに雨がふりだした」といえば、まさに出発なり到着なりの瞬間をあらわすのだが、「10時にいった」はどちらにでもとれる。

「こないだ、母さんと、魚河岸へ買出しに行って買って来た鯨だ」

〈中略〉

「ふうん。朝、何時に行ったの？」

「九時ちょっと前だ。母さんと、両手に持てるだけ持って帰って来た。いい運動だった」(曾野綾子「太郎物語 高校編」)

「九時ちょっと前」は出発か到着か不明。大旅行ではなく、文脈からはどちらでもいいのだろう。

「これは伊豆へゴルフにいったときに小田原でかったカマボコだ」といったとする。おそらく、カマボコは伊豆からの帰りにみやげとしてかったものだろう。つまり「伊豆へいった」には帰りもふくまれているわけである。

「～ときにもらった賞品だ」といえば伊豆に滞在中のことである。しかし

「これは伊豆でゴルフをしたときに小田原でかったカマボコだ」とも言えそうだ。「伊豆でゴルフをする」に小田原での行動がふくまれるのは変だが、暗黙に伊豆への旅行がふくまれている、と解釈すべきか。

三. 「いく」以外の移動動詞

「かえる」は帰路である。

京都へかえったとき新幹線で富士山をみた。

京都からかえったとき新幹線で富士山をみた。
したがって往路への動作の拡張はない。しかし

京都からかえったとき家から新幹線ではみえなかった富士山がみえた。
たとえば、「かえった」が移動終了以後の存在に拡張されている。

「山にのぼる」は〈のぼる→山頂にいる→くだる〉という一連の動作を代表する。

短期間で効率よく働いて資金を稼ぎ、長期間山に登る。(毎日新聞2000年2月28日)

では、かなりの時間を山での滞在および下りにつかったにちがいない。

「いく」が復路に拡張され「のぼる」が下山に拡張されるのは、「ちいさい」が有標なのに対して「おおきい」が無標だといわれるのと同じく、これらの動詞が無標の位置にあるのであろう。

「田んぼに耕運機を入れる」は文字どおりには耕運機の田への移動をあらわすが、実際にはその田をうなう全体の動作をあらわすことが多いだろう。

「車の屋根にのる」は(屋根への)単なる移動動詞である。しかし、「車にのる」という連語は「車に乗り込む」とおなじく、位置の変化(乗車)をあらわすこともある。つぎの2例はどちらも単なる乗車とおもわれる。

草臥れたから、車に乗って宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。(夏目漱石「坊ちゃん」)

おぬい婆さんの心は、馬車に乗ってからずっと他のことに奪われていた。

(井上靖「しろばんば」)

しかし、「車にのる」は、車という道具を本来の機能ではたらかせる、移動のしかたをあらわす動詞としてつかわれるのがふつうである。「のりこむ」よりも「ドライブする」の仲間で、「駄まで車にのる」は「駄まではしる」とおなじような性格をもつ。

電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた。(夏目漱石「明暗」)

では、このあとにつづく文が「身動きのならない程客の込み合う中で、彼は釣草にぶら下りながら只自分の事ばかり考えた。」だから点的だが、あとの文が「しかし、電車をおりて歩いているうちに…」ならば、「乗っている時」と同じく、のっておりるまでの全過程をあらわす線的表現である。

「のせる」も「のる」とおなじく車への移動(「お客を駅でタクシーにのせる」と車による移動(「お客を駅までタクシーにのせる」)とがある。「つむ」は「荷物を駅でタクシーにつむ」とはいえるが、「荷物を駅までタクシーにつむ」とは、いえない。

「まで」があると、車による移動であることがはっきりする。

三宿の電車通りから本郷駒込まで自動車に乗つたのだつた。(葛西善蔵「酔狂者の独白」)

指定された私鉄の乗換駅まで電車に乗った。(大江健三郎「戦いの今日」)

ロサンゼルスから成田までは飛行機に乗るが、(毎日新聞2000年5月28日)
移動の範囲は「まで」以外につきのような表現によってもあらわされる。

三島から一駅だけ汽車に乗った。(井上靖「しろばんば」)

「乗車する」にも「のる」とおなじく、2つの意味がある。つぎの4例はおなじ作品(松本清張「点と線」)からのものだが、まえの2例は位置変化の点的なうごき、あとの2例は線的なうごきである。「何時に乗車する」と「ドコドコから(ドコドコまで)乗車する」で、ちがいがわかる。

博多駅は九時十分ごろに乗車したことになる。

佐山とお時とが、《あさかぜ》に乗車するのを発見したのは
車両こそ違え、函館から乗車したのだ。

安田辰郎は、小樽駅から《まりも》に乗車したのではあるまいか？

ただし、「～まで」は線的な動作の指標として、じゅうぶんだとおもわれるが、「～から」はややよわい。「函館から乗車した」を「函館で乗車した」とおなじ動作と解釈することもできそうである。「試合は1時にはじまった」と「試合は1時からのはじまった」で対立が中和しているように。

「車にのる」はマデ格とむすびつく。これは「のる」という動詞の格支配ではなく、「車にのる」などの連語の形で格支配をかんがえるべきである。「ダレダレニあたまをさげる、帽子をふる」などで、「さげる」「ふる」に対人的な格支配をみとめるわけにいかないように。

四. 移動動詞以外

「さがす」が「それらしい姿をさがした」では発見のための動作(経過)を、「新たに探した貸家に移った」では動作+結果をあらわすような例については宮島 [1972], p.218以下を参照。

つぎの「放り込む」は、文字どおり下着を放り込んだ動作だけをあらわし、以後の動作は以下の表現によってあらわされている。

シャツ、ストッキング、下着を、洗濯機に放り込みスイッチを押してユニットバスの扉を開け、浴槽に栓をして蛇口を捻った。(柳美里「家族シネマ」)

しかし、つぎの例では、あきらかに表現されてはいないが、おそらく洗濯機のスイッチをおして洗濯をはじめたものとおもわれる。つまり、この「放り込む」は洗濯全体を代表しているのだろう。

びしょ濡れになった服をまとめて、洗濯機に放り込み、新しい下着にジーンズで机についた。(富田倫生「青空のリスタート」)

「ねる」は、ちいさな動作としては〈横になる〉または〈眠り込む〉ことをあらわす。

その夜寝てから、栄二は幾たびも「ばかなやつだ」と呟いた。(山本周五郎「さぶ」)

何時か寝たものと見えて、眼が覚めた時は、何にも考えていなかった。(夏目漱石「坑夫」)

また、1度眠ってからおきるまでの全体をあらわす。

ともかく眠りたくて二階で寝てから降りてきてみたら、離れへ一人で入ってお便所でしゃがんでるんでしょう。(有吉佐和子「恍惚の人」)

さらに長い時間としては病床にあることをもあらわす。

その姑も、船橋の特別養護老人施設で一年半寝てから亡くなった。(森清『選び取る「停年」』)

森鴎外が「阿部一族」をかいたのは、1913(大正2)年だといっても、文学史の記述として、まちがいはない。しかし、じつは、この小説は同年1月の

『中央公論』に発表されたものだから、ほんとうに「かいた」のは、1912年（あるいは、もっとまえ）のはずである。ここでは、「かく」という動詞が作品の発表までをふくんだ動作を代表している。一般に、文学史で発表の時期を厳密に区別してあつかうのは、むしろ例外的なばあいだろう。

「手紙をかく、手紙をだす」は、どちらも〈かいて、だす〉両方をふくんだ動作をさすのがふつうである。「父に手紙をかいたが、返事がなかった」では、手紙をだしたこともふくんでいる。ただし、「父に手紙をかいたが、ださなかった」のように、前半の段階しかあらわさないことも、もちろん、ある。

本筋からはなれるが、手紙とメールの発信の動詞をコーパスでしらべてみると、つぎようになる。ただし、この数字には「手紙をきのう書いた」のように名詞と動詞が直接つながらないもの、「かく、かいた」のようにかな書きのもの、「書いたり、書いたら」のように語形がちがうものは、ふくめていない。「メール」には「電子メール」をふくむ。

手紙を書く : 162 書いた : 123 計 : 285

メールを書く : 27 書いた : 3 計 : 30

手紙を出す : 46 出した : 50 計 : 96

メールを出す : 26 出した : 10 計 : 36

手紙を送る : 15 送った : 21 計 : 36

メールを送る : 130 送った : 82 計 : 212

手紙をする : 0 した : 1 計 : 1

メールをする : 46 した : 28 計 : 74

手紙する : 0 した : 0 計 : 0

メールする : 125 した : 71 計 : 196

ただし、「手紙をする」の例は「置き手紙をした」である。手紙は「書く」がおおく、メールは「送る、する」がおおい。手紙は書いてすぐに送るとはかぎらないが、メールは書いたらその場で送るのがふつうだから、「書く」と「送る」をわけて考えないのだろう。

五. 動作名詞

おなじ現象は動作名詞についてもあてはまる。けがをしたのが山上にいたときでも山を下るときでも、「登山中の事故」といえるだろう。「上京のときにサイフをなくした」は往復どちらでも可。「上京の途中で」なら行きにかぎる。ブラジルへいくのが留学のためでも仕事のためでも、いずれかえってくる予定なら「旅行」である。「ブラジルへの旅行のときに」はブラジルへいく途中で滞在中でも帰途でもいい。移民のばあいは永住の予定で、行きしか問題にならず、「旅行」とは言いにくい。「航路」だろうか。

六. 行動と準備

これはわたしが大学を受験したときにつかったペンだ。
とは言える。

これはわたしが大学を受験したときにつかった参考書だ。
もしいが、これは「受験」の意味がちがう。受験というのは願書をだしただけではだめで、実際に試験をうけなければ「受験した」とはいえない。試験のときに参考書をもちこむはずはない。だから、これは受験の準備、受験勉強でつかった参考書と解釈しなければならない。つまり、厳密な意味での「受験」だけでなく、その準備期間も「受験」にふくまれることになる。これは「受験した」でなくて「受験する」でも「受験の(とき)」でもよさそうだ。

このように、本来の意味はせまいのだが、文脈によっては行動の準備期間までふくんであらわすという現象は、いろんな動詞についてみられる。

この地図はスイスへいったときに成田でかったものだ。
では、成田へいったことが、もう「スイスへいく」という動作の第一歩をふみだしたといえるとすれば、意味の拡張はおこっていない。しかし、飛行機にのったときがスイス旅行のはじまりなら、その準備の段階が「スイスへ行く」ことにふくまれている。

この地図はスイスへいったときに神田の三省堂でかったものだ。

では、神田から成田へ直行しないかぎり、旅行本来の時間にはならない。つまり「いく」の意味が拡張されている。地図をかった時間は、旅行から1週間または1月くらい、はなれていてもよさそうだ。

元は日本へ侵攻したさい、南宋に命じて兵船をつくらせた。

(兵船をつくっているときには、まだ侵攻していない。)

ダムをつくったとき、まず物資輸送の道路を整備した。

(道路を整備する段階は、ダムの建設にはならない。)

レイコフ [1993], p.93は一連の動作の一部が全体を代表する例として「パーティーにはどうやっていったのですか」という問いに答えるばあいをあげている。

前提条件：乗物を持っている(あるいは、乗物が利用できる)

搭乗：乗物に乗り、発進させる

中核：目的地まで車で(ボートで、飛行機で……)行く

仕上げ：駐車し、外へ出る

終了点：目的地にいる

「兄の車を借りました」というのは前提条件だけで、中核をふくんでいないが、これで全体を理解させることができるのである。

しかし、ある動作の前提条件であるか中核(動作そのもの)であるかは、区別がむずかしいばあいがある。自宅から成田までの移動は〈外国旅行〉の一部か、それとも前提条件か。洗濯機に洗濯物を放り込むのは洗濯の一部か前提か。

終了点についても、同様にあいまいなことがある。「雑誌に小説をかく」終了点は原稿を書きおえることか、雑誌に発表することか。「食事」には、せまい意味で「たべる」ことだけをあらわすばあいと、それをふくんだ、もっとひろい行為をあらわすばあいとがある。お茶をのむことだけなら「食事」とはいわない。しかし、せまい意味での食事がおわったあとで、お茶をのんでいるときに、「まだ食事がすんでいないから」といえるだろう。このばあい、「もう食事がすんだからお茶をのんでいる」ともいえる。上着を着、ズボンをはき、しかし靴下はまだ、という段階で「まだ着物を着おわっていない」とも、「もう着物は着おわったから」ともいえる。これらの例では、動作の最後の部分が、ばあいによって無視されるのである。

七. 入学・入院・入国

「入院する」「入学する」は

六日に鎌倉養生院に入院した。(コーパス「マンガ狂につける薬」)

六十三年前、私が徳島の女学校に入学した時、割烹の時間というのがあって(コーパス「寂聴生きいき帖」)

のように動作・状態の開始を

病院に入院している時は、妻は(コーパス「輝きの日々のために」)

同君は、文理大の理系(生物学専攻?)に入学していた。(コーパス「人生は奇縁なり」)

のように「～ている」の形では結果の継続をあらわす。また、「入院する」はしばらく病院に入院して、自宅に帰っても問題ないのでしょうか(コーパス：Yahoo! 知恵袋)

自己負担は30日間入院した場合で9千円(コーパス「厚生白書」)

と、期間の明示によって持続的な動作である場合をもあらわすが、「入学する」にはこのような用法はないようである。「*3年間入学した」のかわりに「3年間在学した」という。

入院したあとでヒゲをのばした。

は両方の意味(入院中に、退院したあとで)に解釈できる。最初にあげた「風呂に入る」もこれと同類である。

瞬間的な動作と継続的な動作・状態とをあらわす「入院」タイプと、瞬間的な動作しかあらわさない「入学」タイプの動詞がある。

「入院」型：「入所」「来日」「訪日」「帰国」「入獄」

「入学」型：「入国」「入会」「入居」「入京」「入校」「入港」「入社」「入場」「到着」

「来日する」「訪日する」の例をあげる。まえの例は到着、あとの例は滞在である。

11日に来日するガリ国連事務総長との会談のためとしている。(毎日新聞 1994年9月7日)

オルブライト米国务長官が29日から31日まで来日することが決まった。

(毎日新聞2000年7月28日)

ブーチン大統領は平和条約締結問題などを話し合うため、9月3日に訪日すると表明した。(毎日新聞2000年7月30日)

今月22日から24日まで訪日する韓国の金大中大統領(毎日新聞2000年9月4日)

八. 提喩と換喩

ひろい意味での比喩のなかに、隠喩(メタファー)と換喩(メトニミー)のほかに「提喩(シネクドキ)」とよばれるものがある。

全体と部分の関係は換喩とともに提喩とされることもある。たとえば『ラールス言語学用語辞典』[1980]は「帆」という部分が「船」という全体をあらわす用法を換喩の項にも提喩の項にも例としてあげている。欧米では全体と部分の関係を提喩とするのが主流だという。(山泉 [2004], p.273)しかし、これは換喩とすべきだと考える。全体と部分、という表現は「船」と「帆」のような空間的な全体・部分をさす場合と「船」と「汽船」のような概念上の上位・下位をさす場合とがあり、これが混同されているのである。広辞苑は「提喩法」の規定に「全体と部分との関係に基づいて構成された比喩」という表現をとっていて、誤解をまねきやすいが、実例としては、「花」で「さくら」を(上位→下位)、「パン」で「食物」を(下位→上位)あらわす例をあげており、これは正しい。提喩は上下関係にもとづくものであり、全体—部分の換喩とは区別されるべきものである。Seto [2003] 参照。この関係が1つの単語のなかで分化することもある。日本語の「手」は英語の hand と arm の両方をあわせた範囲をあらわしており、「手をけがした」というと、どちらの部分か、あきらかでない。しかし、「手をにぎる」というときは hand であり、「手をあげる」というときは arm である。つまり、基本的な意味が全体だとすれば、用法のうえでは、全体から部分へという変化・限定がおこっているのである。

部分と全体との関係は、類義関係(synonymy)・反義関係(antonymy)・上位下位関係(hyponymy)などとならんで、meronymy とよばれる。Brown [2002] それは、からだ→手→指→つめ、のように、基本的に具体名詞におおいが、動

作をあらわす抽象名詞があつかわれることもある。たとえば Winston は paying は shopping の部分だという。「金の支払い」は「購入」の一部だ、とは日本語でもいえる。Cruse [1986:174] も meronymy の章で動作が時間的にくぎられた部分に分かれることをみとめている。動詞(動作)にもないことはない。Lyons [1977:314-315] は、「ぬう」と「仮縫いする」「しつける」など動詞の例をあげ、上位一下位関係か全体一部分関係、あるいはその中間段階か、としている。「店をあける(しめる)」はドアの開閉だけでなく営業の開始・終了をあらわす。対応する英語の open、close も同じである。(Matsumoto [1995])

参考文献

- C.H.Brown [2002] 'Meronymy' ("Lexicology: Handbooks of linguistics and communication science" 21.1)
- D.A.Cruse [1986] "Lexical semantics"
- R.Dirven [2002] 'Figurative use of language' ("Lexicology: Handbooks of linguistics and communication science" 21.1)
- J.Dubois et al. [1973] "Dictionnaire de linguistique" (J. デュボワほか著: 伊藤晃ほか訳 [1980] ラルース言語学用語辞典)
- G.Lakoff [1987] "Women, Fire, and Dangerous Things" (レイコフ著: 池上嘉彦ほか訳 [1993] 『認知意味論』)
- J.Lyons [1977] "Semantics 1"
- R.Matsumoto [1995] 'On the Metonymic Extension' (『東信行教授還暦記念論文集』)
- 宮島達夫 [1972] 『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所
- 村木新次郎 [1987] 「対義語の輪郭と条件」『日本語学』6-6
- N.R.Norricks [1981] "Semiotic principles in semantic theory"
- Y.Okada [1998] 'Remarks on the asymmetry of antonyms in modern Japanese' (Lexicon 28)
- G.Radden & Z.Kovecses [1999] 'Towards a theory of metonymy' (K.-U.Panther & G.Radden "Metonymy in language and thought")
- K.Seto [2003] 'Metonymic polysemy and its place in meaning extension' (Nerlich et al. ed. "Polysemy")
- M.E.Winston et al. [1987] 'A taxonomy of part-whole relations' (Cognitive science 11)
- 山泉実 [2004] 「シネクドキの認知意味論へ向けて——類によるシネクドキ再考——」(『認知言語学論考』No.4)